



TITLE:

天文臺の屋根の下

AUTHOR(S):

花山子

---

CITATION:

花山子. 天文臺の屋根の下. 天界 1932, 12(131): 121-121

ISSUE DATE:

1932-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161880>

RIGHT:

## 天文臺の屋根の下

ひと時前頃、世には、彼の「巴里の屋根の下」とか申すいとも奇しき映画が上演されて、其れに伴ふ流行歌が一時全世界を風靡したと云ふ事で、其映画の Production たる佛國の何とか云ふ會社が、此不景氣にも拘らず、ボロ儲けをしたらしいが、我日の本の國でも、其後、或は「大學の屋根の下」だとか或は「何とかの屋根裏」だとか云ふ工合に、棚ボタ式にいつも柳の下を搜したさうだが、果して「ドゼウ」が居たかどうかは、是れ花山子の關せぬ所。ドウジョ御許し下さいではシャレにもならない。所が内地は關西、關西は京都、其の京都の遙か東方、遠くて近きは、(古い言ひ草ながら)春霞の紫煙にかすむ「三十六峯」東山の一角に、折から沈む行く春の陽を斜に受けながら、其七色を一點に集中して燦然と銀色に光るドーム。其處には所謂天文臺なるものが存在し、従つて、所謂「天文臺の屋根の下」なるものも存在する所以ではある。其れにつきましても、此の天文臺の屋根の下で御座んすが、いつも蜘蛛が巢をかけ、雀が糞をし、鼠があばれるものと思はれては折角銀色に光つて居るあのドームが泣く。では何をかを「屋根の下」とは云ふや—花山子が今回述べんとする主要眼點は實に此處に存在するんである—エー前置きはいゝ加減にして置いて扱てボツボツと御話しませう。一實は一實はです。—今度又もやお目出度いお話がありましたので、其上、今度も前と同じく黄道光課にいと密接な御關係があり、且變光星課の大株主で、尙又、新星の研究家であらせられる、おなじみの小山先生……其小山先生が今度目出度く御結婚遊されたと云ふ事なのであります。さきに稻葉先生、今は又小山先生、黄道光課に御關係のある方々には、此頃、御目出度い事が續く。道理で此頃、本物の黄道光の様子がチトをかしいのも無理はないで……。冗談はさてをき、花山子此邊で、居住ひを正し改めて謹しんでお祝ひ申上げる次第である。小山先生は此れからも變光星の御研究をお續けになると承つて居るが、其の榮ある御前途を望み見て誠に慶賀に堪えず、何卒専心一意邁進されん事を祈つて止まない。さて、こうなつて見ると此の次は誰方の番であるか。？ 黄道光課に御關係のある其の邊の方々御用心！御用心!! 天文臺の屋根の下も、近頃、景氣がよくザツト此んなもんや。

天文臺の屋根の下 セコム サツサツサ だ。惡からず—

(花山子)